
理想郷

赤田サチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理想郷

【Nコード】

N3644D

【作者名】

赤田サチ

【あらすじ】

江木紀恵、三十四歳。十年前、刑事だった恋人を失い深い傷を負った。現在は夫と娘、三人で都内のマンションに暮らす。……日々起こる些細な出来事をきっかけに前々から感じていた疑問が大きなものへと変わる。それが頂点に達したとき紀恵はどうなるのか。

序章（前書き）

この物語はフィクションであり、実在する人物名、団体、地名とは一切関係ありません。

序章

私は一点を見つめていた。

私に見つめられた彼——恋人、君島直樹きみしまなおきは、目も口も固く閉じて彼を取り巻く静寂を決して壊すことなく眠っていた。

——霊安室。薄暗いこの部屋では直樹の顔がどのような色を帯びているのか分らない。だからこそ、私には彼がただ寝ているだけのように見えた。死んでいるようにには思えなかったのだ。しかし彼は起きない。私を捕らえて放さない、よく動く彼のその大きな目は、自ずから開かれることはなかった。

私は傍らに在る白い布を目にした。彼の顔を覆い隠していた布だ。思わずそれを睨んだが、だからといって布が消えるわけでもなく、ましてや彼が目を覚ますこともなかった。

「————っ」

私は声を出そうとした。けれども何かが胸につかえ、声にならない。

「紀恵さんのりえ……」

後ろから誰かが私の名前を呼び、私の肩に手をかけた。直樹の職場の後輩で、彼と仲が良かった鵜飼英司うかいえいじだった。私が再び、しゃべらぬ直樹の方に目を向けると、私の頬を水が伝った。

「……直……樹」

水が零れるのと同時に、声も出せるようになった。

「直樹、直樹、直樹っ……」

さっきまで声が出なかったことが嘘のようだった。私は溜まっていたものを一気に吐き出すように、同じ名前を連呼した。やはりその名前の主には何の反応もない。

「直樹……」

私はその場に泣き崩れた。床がひんやりと冷たかった。

私達はさっきまでいた白い建物を背に、街路樹の植えられた道をひたすら歩いた。赤信号が私達の足をとめた。

「本当に残念です……」

「ええ……。でも彼は刑事だったから。私はどこかで覚悟は出来ていたのよ」

嘘だ。覚悟などしていなかった。大切な人がこんな形で死ぬなんて、テレビや小説の中だけ、所詮は他人事だと思い込んでいた。鵜飼刑事はそんな私の心情を読み取ったのか、心なしか彼の表情が寂しげ

に見えた。

「あの人は……君島さんは立派だった」

鵜飼刑事は目の前を走り去る車を見ながらそう言った。それは私に對しての発言なのか、はたまた単なる彼の独り言なのかは、私にはよく分からなかった。

「人質を助けるために、自分が犠牲になったんですから」

立派に死んでいくくらいなら、逃げ腰で生きて私の傍にいてくれた方がよっぽど良かった。頭の中で思うだけで、こんなこと実際に人には言えなかった。

「俺には出来ません」

鵜飼刑事は私の方を向いて言った。この言葉は確実に私に對してのものだと分かった。

走っていた車は徐々に速度を落としやがて止まり、私達を指揮する信号は青に変わった。何人か信号待ちしていた人達と共に、私達もまた進み始めた。鵜飼刑事は黄土色のコートのポケットに両手を突っ込み、天然パーマの髪を揺らしながら、俯き加減に歩いていた。私達は、その後互いに会話を交わすこともなく、黙々と歩いた。時折吹く冷たい風に、私の黒髪が乱れて顔にまわりついた。

直樹が病院に搬送された直後、私も病院に到着した。彼が然るべき場所で手術を施されている間、私はこうなった過程を簡単に聞か

された。

直樹は“強盗に遭った”という店長の通報を受け、何人かの刑事（その中には鵜飼刑事も含む）と共に銀行へ駆けつけた。警察の登場で、犯人は相当焦った様子だった。

犯人はすぐ近くにいた四、五才くらいの少女を人質を取り、その人質に拳銃を向けていた。少女は当然泣き叫んだが、それに驚いた犯人は、人質を自分の手から突き放し、奇声をあげて人質めがけて引き金を引こうとした。直樹はすぐさま少女を助けようと、その子の前に飛び出した。犯人はそのまま引き金を引いた。放たれた弾は直樹の腹にねじ込んだ。彼はその場にうずくまったかと思うと自分の後ろにいる少女に笑顔でこう言った。

「けがはないか……？」

少女は頷き、その直後直樹は倒れ込んだ。彼の体も彼のまわりも血だらけだった。警察は少女を保護し、犯人を取り押さえた。

これが私が聞いた内容だ。本当にドラマのようだと思う。涙目で話す鵜飼刑事の顔が印象的だった。

私と鵜飼刑事はこの交差点で別れる。彼は交差点を左に曲がり、私はそのまま真っすぐ進むと家がある。彼は“それでは”と私に軽く頭を下げ、左に曲がった。私も頭を下げた。一昨日買ったばかりの革の茶色いブーツに少し汚れがついているのが目に入った。私はそれをはらうことなく頭を上げた。日が沈む。私には夕日が真っ赤な血に見えた。

序章（後書き）

コナンFFを執筆させて頂いています、赤田サチです。オリジナル作品は今回が初めてです。それ故、評価・感想ぜひとも頂きたいと思っております。

ジャンルについてですが、どうしようと悩んだ挙句、根本的な部分で適当に。すみません……。

1 日常

私は最愛の人をなくした。随分前の話だ。忘れられない。今もこうしてその人から貰った腕時計を大切に身につけている。私は腕時計をつけたその手で、自宅マンションの郵便受けに手を伸ばした。

……東京都杉並区——江木紀恵様
えぎのりえ

携帯電話の電話代の請求書、デパートのバーゲンのお知らせ、それに……白い手紙。ひっくり返して裏面を見た。

……静岡県清水市——君島彰子
きみじまあきこ

見覚えのある名前だ。それどころかはっきり覚えている。最愛の人“君島直樹”の母親の名前だった。私はその手紙を手に、エレベーターに乗って六階を目指した。

玄関でスエード調の赤いショートブーツを脱ぎ、居間に入った。一番最初に目についたものは縁の白い円い壁掛け時計だった。その時計は三時十分を示している。腕時計を見ると、長い針は、ちょうど12を指していた。そうだった。この時計は遅れている。直樹が死んでから少しずつ遅れていくのだ。

私は時計から視線を離し、クリーム色のソファアームに鞆を置いて腰掛けた。さっきからずっと持っている手紙の封を、ペン立てにあったペーパーナイフを使って開けた。中には便箋が二枚入っている。

拝啓

日ごとに冷氣加わる今日このごろ、風邪など引いていらっやらないか心配です。私はおかげさまで風邪も引かず元気に暮らしております。久しいご無音まことに申し訳ないしだいでございます。

さて、直樹が亡くなってから十年、この節目にご連絡をいたしたくこのお手紙を差し上げました。このようなお手紙を最後に私が出しましたのは五年前、紀恵さんがご結婚なさる前でございます。その後も紀恵さんからお手紙をたくさん頂きましたが、失礼ながら私がお返事を差し上げることはありませんでした。

五年前までは、紀恵さんとお手紙のやり取りができ、私自身本当に嬉しく思っておりました。しかし現在は違うのです。あなたはご結婚なさいました。お子さんもいらっやるのでしょう。いつまでも直樹のことを引きずって頂きたくない。傷の舐め合いは止めに行きましょう。紀恵さんには幸せになってほしい。これきりお手紙を差し上げることはないでしょう。

お気を悪くされたのならば申し訳ございません。しかし分かって頂きたいのです。

乱筆乱文にて失礼いたします。
何卒お体にお気を付け下さい。

敬具

十一月十二日 君島彰子

江木紀恵様

ショックだった。つまりは直樹のことを忘れろということか。無理だ。彼が死んで、片時も彼のことを忘れることなんてなかったのに。こうやって直樹との繋がりが消えていくことを恐れていた。私は暫く放心状態で俯いていた。

ふと腕時計を見ると、針は四時五分を指していた。もう四時十五分か……。百合香ゆりかを幼稚園まで迎えに行かなければならない。私は車の免許を持っていないため、歩いて行く。幼稚園までの道のりはそう遠くないので、あまり苦痛ではない。

私はソファアに置いてあった鞆を肩に掛けて、金属製の冷たいドアノブに手を伸ばした。

百合香が通っているのは、大学まで一貫の私立幼稚園である。所謂“お受験”で入ったのだ。ボロい保育園に預けられ、小中高と地元の公立の学校に通い、大学にも行かずにぶらぶらしていた私には、到底考えられないことだった。

本当に立派な建物だ。門からがっちりしていて、何度行っても入りにくい印象を受ける。レンガ造りの建物の周りには枯れ葉が舞っていて寂しく感じる。私は百合香のいる年少組の教室を目指し、園内に足を踏み入れた。

教室の中を覗いてみる。百合香は数人の女の子とおままごとをして遊んでいるようだ。花柄の布を腰に巻いて、プラスチック製のフライパンとフライ返しでこれまたプラスチック製のハンバーグを調理している。滑稽だ。子どものことでさえこういうふうにししか見ることが出来ない。私はこんな人間だ。

「……あら、江木さん」

先生が私に気付き、笑顔で声をかけてきた。

「あの……迎えに来たんですけど」

「お待ち下さいね。……百合香ちゃん」

百合香は先生の呼びかけに反応し、“お迎えが来たよ”と言われると、自分のロッカーから荷物を取り出した。自分で上手く着ることが出来ないため、コートを先生に着せてもらっている。彼女はこのコートをかなり気に入っている。パパに買ってもらったウールの赤いコートだ。ポケットにはクマのワッペンがついている。夫らしい趣味だと思う。

百合香は、こげ茶色の鞆を背負ってトコトコとこちらにやって来た。先生も自分の桃色のエプロンを整えながらやって来る。

「さようなら」

「さよなら」

先生が手を振り挨拶をすると、百合香も手を振りながら挨拶をした。私も軽く頭を下げ、教室をあとにした。

「ねえ、ぱぱは？」

百合香が私と繋いでいた手を離し、自分の両手をたたきながら聞いてきた。またこれだ。彼女はいつも“ぱぱ”の所在を聞く。心なしか、普段から私のことを“ママ”と呼ぶことがあまりない気がする。例えば“ねえ”や“あのね”で済みますのだ。……やはり子どもは感性が鋭いのだろうか。

「……パパはお仕事よ。まだ帰ってないんじゃないかな」

百合香はいつもと同じような私の返答にしょぼんとした顔を見せた。

「……そっかあ」

まだ五時だ。恐らく帰っていないだろう。だいたい七時頃帰ってくる。その時の百合香の嬉しそうな顔といったらない。たまに“ぱぱ”の帰りが遅い時の彼女の不安気な顔は、彼のお土産のケーキで一気に解かれる。

「ぱぱ、はやくかえってこないかなあ」

百合香が小さな声で呟いた。私はこれを彼女の独り言ととって、特に何も答えなかった。

玄関のドアが簡単に開いた。ロックをきちんとかけたはずだ。黒い革靴……。

「ぱぱー！」

「おおっ！ おかえり百合香」

百合香は“ぱぱ”に抱き上げられている。

「あなた……早かったのね」

「ああ。今日は仕事を早く切り上げてきたんだよ」

夫——江木康平えぎこうへいは一流電気機械企業——株式会社OPPおーびーびーに勤めている。そのため経済的には不自由がない。おかげでこんな人よりも良いマンションで暮らせているのだ。

「……おお、小島か？」

康平が百合香を自分の腕から下ろして携帯電話で話をしている。下ろされた彼女は、自分よりも随分背の高い父親を見上げている。どうやら相手は同僚の小島らしい。この二人の会話を聞いていると、直樹と鵜飼刑事を連想させる。

「……えっ？ でも奥さんが怒るって？ ハハッそんなのは関係ないわ」

何を話しているのかは分からないが、私にとってあまり気分の良い話ではなさそうだ。

「……じゃあ。また明日」

康平は電話を切り、下で自分を見つめていた百合香の頭をくしゃくしゃと撫でた。

「明日、仲間連中と飲んでくるから」

康平は手でコップの形をつくり、酒を飲むジェスチャーをして見せた。

「遅くなるの？」

「ああ、悪いなあ。また何かお土産に買ってくるさ」

私の質問に、康平は申し訳なさそうに答えた。彼は本当にいい夫だと思う。娘の面倒もよく見るし、ギャンブルにのめり込むわけでも、女遊びをするわけでもない。ルックスも良ければ、一流企業に勤め私達に一切不自由な思いをさせない。

私が江木康平と出会ったのは、五年前——お見合いでの席だ。このお見合いは両親に勧められてのものだった。三十目の娘を、早く嫁に出したかったのだろう。この時期両親はしきりに私にお見合いを勧めてきた。あまりにうるさい両親に、私は嫌々お見合いを引き受けた。そしてあれよあれよという間に結婚。康平のような男が、なぜ今まで——三十まで結婚しなかったのか不思議だったが、彼の

両親も私の両親も嬉しそうだった。

結婚して五年。娘もいる。幸せを掴んだ。しかし何かが違う。その何かを求めようとすると、脳裏に直樹の姿が浮かぶ。直樹が私の中から消えることは絶対にない。たとえ少しずつだろうが、私が彼を忘れてしまうようなことは絶対に有り得ない。

私はいつの間にか手にしていた白い手紙を、もう片方の手でやさしく撫でた。

2 直樹

私は空気の張り詰めた空間にいた。周りの人間は皆震えている。それにひきかえ、私は不思議と冷静だ。

「……金をこれにつめろ！ 早くっ！」

私のすぐそばにいる、全身黒い男が店員に拳銃を向けている。男はさっきからずっとこの言葉を繰り返している。店員は言われるがままに男に渡された黒いアタッシュケースに札束を詰め込んだ。

……ここは何処だろう？ かつて来たことのある場所のような気がする。

「警察だ！ 銃を捨てろ」

警察がこの場所の出入り口から入ってきた。……直樹？ 警察の中に直樹がいる。何故……？ 私の見間違いなのだろうか？

「こいつがどうなってもいいのかっ」

男が私の髪をつかみ、私を自分の方に寄せた。私は泣き叫ぶ。さっきまでの冷静な態度とは違う。男は焦った顔を見せる。私を突き飛ばした。引き金を引こうとした。

「危ないっ！」

……？ 直樹……？ あの声、あの顔は直樹に間違いない。やはり私の見間違いではなかったのだ。その瞬間、男は引き金を引いた。

私は目を瞑った。しかし痛みはない。目を開け、飛び込んできた光景は、大量に出血している腹をおさえ、苦しそうに呻いてその場にうずくまる彼の姿だった。

「けがないか……？」

直樹は後ろを向き、私の方を見て尋ねたのだ。私は何も怪我を負っていないかった。言葉を発することが出来なかったため、首を縦に振った。

「よかった」

直樹は私にしか聞こえないくらいの小さな声で呟いた。その顔は微笑んでいた。私がそれを見届けると、彼の顔から表情がなくなり、ゆっくりとその場に倒れていった。

「いやだ————！」

全身に汗をびっしょりかいていた。周りを見渡した。見慣れた場所だ。そばにあるこのルームライトや、赤い縁の写真たてに飾られた家族写真、壁に掛かっているお気に入り壁掛け時計が、ここが

紛れもなく自分の部屋だということを証明している。さっきまでいたあの場所ではない。……夢だ。それも十年前に鵜飼刑事から聞いた事件現場の様子を忠実に再現したような夢である。夢であって夢ではない。夢に見たあの場所は銀行だったのだ。どうりで行ったことのあるような気がする場所なわけだ。事件以後行ったことはないが、それ以前はよく足を運んでいた。

あの夢で一つ確実に違っていたのは、直樹が庇ったという少女が私になっていたことだ。夢の中で直樹を殺したのは私だ。

私は写真たての家族写真に手を伸ばした。その裏には直樹と一緒に写った写真を隠してある。その写真の日付を確認すると、十五年前のものだった。私が十九才、直樹が二十才——まだ若い私と私の知る直樹とさほど変わらない彼が楽しそうに写っている写真だ。背景は当時私が住んでいたボロアパートの一室だ。ギターが置いてある。まだ上京してまもない私にできた唯一の友達が撮ってくれたものだったが、彼女は元気にしているだろうか。

このころ私は、上京してギターで歌をうたっていた。人通りの多い東京の駅前広場で、自分が作詞作曲した歌をギターを Beiju うたっていたのだった。歌が大好きだった。上京する前、親には“そんな馬鹿げたこと止める”と言われた。“就職しろ”と。うちには娘を大学に行かせる余裕はなかったため、私に残された道は就職だけだった。しかし私は道をもう一つ増やした。それが上京して大好きな歌をうたい、歌手になることだった。親の反対を押し切り、お年玉を貯めて買ったギターを手に入れた。

現実には甘くはなかった。全くの素人の私に足を止める者などいなかった。皆忙しい。私の歌に耳を傾ける余裕などない。時々立ち止まる人と言えば、ベロベロに酔っ払った中年のオヤジや、からかい目

的の若者だった。もう自棄^{やけ}になっていた。雨が降ろうが大切なギターを守ろうともせずに上を向いてひたすらうたっていた。

雨の日だった。一人の男が私に近づいてきた。関わりたくなくて、気付いていないフリをし、ひたすら歌をうたっていた。

「風邪ひく」

男が自分の傘を私の上にかざした。そのおかげで男の身体が濡れていた。それでも私は無視してうたい続けていた。

「こんな雨降り、歌なんか聞こえない」

男は悲しそうな顔をして私に言った。私はギターを弾く手を止め、うたう口を閉じた。私が俯くと、男は“持て”と言って自分が持っていた傘を私に無理矢理持たせた。彼はそのまま何処かへ消えた。

それから何日か経ってのまた雨の日のことだ。私はいつも通りギターを弾いて歌をうたっていた。蒸し暑い空気の中での冷たい雨は気持ち良かった。

「あんた傘ぐらい持ってないのか」

聞き覚えのある声だった。何日か前のあの男だ。男はまた私の上に傘をかざした。

「冷たくて気持ちいいから」

私はギターを弾きながら答えた。男は“答えになってない”とぼや

いたと思うと、少しよろめいた。私は男の腕を慌てて掴み、立ち上がってもう片方の手を男の額に当てて、

「熱がある」

と忠告した。その後自分のアパートにその男をあがらせ、看病した。見ず知らずの男だが、不思議と嫌な感じはしなかった。その男の名前は“君島直樹”。私がお世話になった傘男こそが直樹だった。

随分と長い間思い出に浸ってしまった。私を思い出に浸らせたこの写真を、カムフラージュのための家族写真の裏にしまいこんだ。起きたときは僅かに明るかった窓の外は、もう完全に明るくなっていた。朝が来た。直樹がいないいつもの朝が。また窮屈な一日が始まる。

ああ……今から始まるこの一日が夢であってほしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3644d/>

理想郷

2010年10月15日01時07分発行